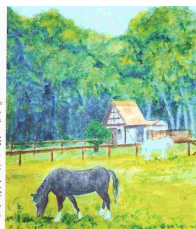


SHIROGANE YOSHI



藤田良範 (亥 78 歳)



尾崎昇 (寅 78 歳)



徳原房代



増田陽一

延び延びと猫のまねして円か哉 (申 93 歳)
 オリオンやダイヤモンドを眼で結ぶ (高志)
 億年のひかり放てり寒昂 (璃子 亥 103 歳)
 年女生きてるだけで〇もうけ (百合子 午 83 歳)
 賀状来る写楽に言はすおめでとう (みち)
 クマに噛まれず転倒もせず孤り酒 (陽一 午年 95 歳)



初詣 午年 83 歳 高志



初詣 午年 83 歳 みち



尉鶺鴒 (俳文 ①)

初鴉腥 なまぐさきものをもて饗きょうし
 海に岩あれば初日の岩よりす
 田作りを噛む間も地球自転なす
 モノクロの世界寂しき夢はじめ

璃子 (穴まどひ平 21)	高志選
〃 (〃)	〃
〃 (〃)	みち選
〃 (〃)	〃

定例会(二月の兼題…)

二月二十日(金) アビスタ第五会議室 12~15

三月二十日(金) アビスタ第三会議室 12~15

四月十八日(金) アビスタ第三会議室 12~15

一月句会(26/1/19 兼題:新年一般) 太字は当日句

光成高志

元旦や鳩一羽来てこちら向く

十一面観音像に初参り

初筑波くつきり見えてめでたけれ

丑寅にあはれ満月ある三日

満月に木星侍る三日宵

光みち

金色の屠蘇こそめでた舌の上

初筑波二峰尖つてむらさきに

賀状来る馬の足跡四つ付け

玄関の靴整然と三が日

雪少し積り三日の夜明けかな

浅野正美

初茜何か良い事ありそうな

成願寺頂くお神酒初詣

初神籤それぞれの吉結びけり

初景色ダイヤモンド富士湖面にも

初場所は話題豊富でワクワクす

佐々木由紀子

初春や目覚め手合せありがとう

元旦やカーテン開けて日を拝む

元旦や元気に起きて顔洗ふ

初春や神や仏に願ひ事

お雑煮や感謝の気持ち伝えけり

山尾万世遊

レコードのジャズ聴く一日松過ぎて

都鳥かくも集めし隅田川

一棟の団地抜け来て初詣

ぽかぽかと日差すホームの年始め

松過ぎと見えぬ人出の浅草寺

尾崎昇

年玉や昔の我に帰りをり

陽光で新聞読むや冬の蠅

夜冷えて布団の重さ身に応え

奥山の餌なき熊や人襲ふ

里山や枯野に残る獣道

171号選句一覧 ○字は選者の頭文字。黒塗りは特選

正の富里山や枯野に残る獣道

枯野を駆け巡るのは熊ならぬ猪でしょうか。獣道として残っている

のを発見したのです。遠く芭蕉の夢に通底していると思います。

⑨レコードのジャズ聴く一日松過きて

⑩元旦や鳩一羽来てこちら向く

⑪初茜何か良い事ありそうな

⑫初春や目目覚め手合せありがとう

⑬金色の屠蘇こそめでた舌の上

⑭読み初めに図書館行きて知を深め

⑮年玉や昔の我に帰りをり

⑯都都鳥かくも集めし隅田川

⑰元旦やカーテン開けて日を押む

⑱初筑波二峰尖つてむらさきに

⑲十一面観音像に初参り

⑳成願寺頂くお神酒初詣

㉑初場所や取り直しに沸く声援

㉒陽光で新聞読むや冬の蠅

㉓富一棟の団地抜け来て初詣

㉔元旦や元気に起きて顔洗ふ

㉕初神籤それぞれの吉結びけり

㉖はや寒九ウエブサイトにアップせる

㉗初筑波くつきり見えてめでたけれ

㉘富賀状来る馬の足跡四つ付け

印象に残る賀状だったのでしよう。こちらも想像するのが愉しい。

虎落笛止みそうもなく暮なつむ

夜冷えて布団の重さ身に応え

① 卯ほかぼかと日差すホームの年始め

② 初春や神や仏に願ひ事

③ 富初景色ダイヤモンド富士湖面にも

④ 丑寅にあはれ満月ある三日

⑤ 富富玄関の靴整然と三が日

正月を迎えるにあたつて靴置き場などきれいに掃除をされたこと
でしょう。靴が整然と並べられている様子が想像されます。

⑥ 富満月に木星侍る三日宵

⑦ 侍るがいい表現 いいなと思います。

⑧ 雪少し積り三日の夜明けかな

⑨ 初場所話題豊富でワクワクす

⑩ 富お雑煮や感謝の気持ち伝えけり

⑪ 富松過ぎと見えぬ人出の浅草寺

⑫ 奥山の餌なき熊や人襲ふ

俳窓評論纂

飛鳥路ⅡⅡ 龜井勝一郎 を再度読んで以前の思いが

浅薄であつたことに気づいたのでここにもう一度思うところ

を書いてみる。飛鳥路はすべて墓場だ。この一文からは

じまる氏の歩いた地の感想が書かれてある。なぜか私も飛

鳥には気が魅かれてもう前にそう六〇代に京都から訪ねて

自転車で目星をつけた場所を見て回ったことがあつて氏の

文章が一々合点がいき、一気に読んだ。しかしながら、私

が見た所を古代の歴史から解釈されているので半ば観光で

回ったのと訳がちがうのである。その要約を書きつつ書評を書いてみよう。(その前に氏の文章が高一に載っていたのを思い出したので再読した。「わたくしは文学をいかに学んできたか」という題にて、学生教養新書から採った文章である。これを紹介する方が第一だと思うのでそちらを要約する。氏は明治40年函館に生まれた。私の母と同じ年である。そのころの日本文学界は藤村・花袋・白鳥らの自然主義作家が活躍を始め、一方には漱石や鷗外たちも作品を発表し明治文学の花開くころであったが、氏の環境ではそれへの関心と呼び起こすようなものは何もなくあった。平凡な少年としていたして読書もせずに、のんびりと暮らしていたのである。しかし氏の街、函館は日本で一番古い開港場の一つで、異国情緒が漂っていて、各国の領事館があり、外国船の往来も多く、アメリカ人・イギリス人・ロシア人・中国人たちも多く住んでいた。氏の家は異邦人の居留地の跡にあつて、教会も多く、フランス・ロシア・イギリスの教会があり、家の裏側には聖パウロ女学院などがある、そういう雰囲気の中に家があった。そういう場所が氏の小中時代の遊び場であり、幼稚園・日曜学校、その派の教会へ通っていた。宣教師や牧師から聞く「バイブル」の話が唯一の知恵の泉だった。多くの文学者が皆少年のころから文学書に読みふけたように書かれてあるが、氏にはそういう経験はない。巖谷小波の童話、立川文庫の豆本の中の「猿飛佐助」とか「水戸黄門」など、子供向きの講談を三読んだ記憶があるが、まとまった文学書はなに一つ手に取った記憶はない。しかし今振り返ってみて、自分の感性を養ってくれたものがあつたとすれば、それは故郷の自然ではなかったかと思われる。函館は津軽海峡に面した港町である。立待岬に立てば石川啄木の碑がある。日本海と太平洋をつなぐ紺碧の潮流が激しく流れていくのが見える。その向こうに津軽の山々や下北半島がかすんで見える。こんな調子で氏の文章

を紹介していたら飛鳥路が書けなくなってしまうが、もう少し辛抱あれ。函館の郊外の湯の川温泉、女子トラピスト修道院のことや夕暮れの波止場の鷗や日没の風景を思い出し、札幌のピューリタリズム、小樽のリアリズムに比して函館のロマンティズムと呼んでみたが、こうした風景が氏の文学心を知らず知らずのうちに育てたのかもしれない。文学と云えば何よりもまず小説を読むことがあげられるが、それも当然ではあるけれど、自然と風景の影響は、思いのほか、われわれの心に「文学」を植え付けるのではなからうか。それは、はつきりと結果を描え難いものだが、われわれはもつと自然をたいていせつにし、自然を眺める目を養うべきと思う。もつと少年のわたくしは、その点でも無自覚であつたが、今となつては、やはり故郷の自然の影響を思わずにはいられない。それとも、これは望郷の念というものかもしれない。郷愁かもしれない。以下には高等学校に入つて以後の文学遍歴が書かれてある。当初ゲーテ・ハインェを読み、人生と自然と美を学んだ。ファウストの鷗外訳が載せられて、ここに青春と呼び覚ます声を聞いた。聖書とゲーテの「対話」という最大の書物に接したのは感謝すべきことであつた。今一つ氏に大きな影響を与えたのは、ゲーテの「イタリヤ紀行」である。これはゲーテみずからがこの古典の地を求めて歩いた紀行で、氏もどうかして一度はギリシヤやイタリヤへ旅行して古代ローマやルネサンスの跡をたどつてみたいと空想した。青年時代の烈しい夢であつた。しかし簡単に海外旅行のできるはずはなかつた。ただこのことが動機となつて、学校を出てから日本の古典の地へ目を向けるようになった。「イタリヤ紀行」に学びながら、日本の古典の地たる大和の旅へ上るようになったが、これは、やはり一つの大きな収穫であつた。氏は大和の古寺を巡り、「万葉集」や「日本書紀」を愛読した。日本の古典に深くはいるうと思つた。ゲーテも無論大切だが、自国の古典・歴史・伝統に無知なこ

とを恥と思った。ちょうどゲーテが古代ギリシャやイタリアのルネサンスに深く学んだように、氏はその点で、日本において同様のことを試みようとして、ゲーテを模倣したわけである。一個の旅人としてかなり空想的に古典の地を歩いたわけであるが、それでも単に読書だけでなく、実際にその地を歩いたことは、氏に古典への興味を深くいだかせたのである。大和の古寺を訪れたのは昭和十二年ころであったが、それから十数年間私は暇さえあれば、春秋には必ずそこへ旅するようになった。そして古寺を巡っているうちに、単に美術的鑑賞だけでは満足できず、しだいに仏教に心傾けるようになった云々。氏はその後法隆寺の成立した飛鳥時代に興味をいだくとともに、「聖書」から「対話」へと移った氏は今度はさまざまな経文を読むようになり、わけでも親鸞の教えに接したことは生涯において一大事であったと思っていると同様されている。仏教徒として生きるようになった。青年期から壮年期へかけての激しい時代に直面して、心の動揺はやまず、迷いに迷ったあげくの再生の祈りも強く作用していた。聖徳太子から親鸞に至るその流れをいくたびも学ぼうと努めてきたのである。文学だけを学んだわけではなく、さまざまの意味で教えを受けた先輩をあげるならば、キリスト信徒としての内村鑑三、東洋美術の岡倉天心、作家としての島崎藤村、武者小路実篤・倉田百三・岡本かな子といった人たちに心傾けてきた。他にもひろく読むが、自分として、今までその肖像を描いた人と云えば以上のような人たちである。多

方面にいろいろなものを撰取してきた。文学を学ぶということは人生を学ぶことであり、人生いかに生きべきかを問うことであり、その意味は決して単純ではないが、この問いは忘れまいと思っている。現代はいうまでもなく、日本とつて大変な苦難の時代である。こういう時代には、過去のものは美しくうつらやましくも見えるものである。しかし、過去の芸術家も宗教人も、やはりその時代の苦悩はまともに背負って生きてきたわけで、時代苦や人生苦を味わう点では変わらなかったであろう。人一倍感じやすい人々にとつて、楽な環境などあるはずはない。どんな時代、どんな環境に恵まれても与えられただけのものには不満を感じ、それに抵抗し、孤独において仕事を残したのである。以上殆ど氏の文章をコピーした。私は龜井勝一郎の文章には魅かれていた。今読み返してみても高三の秋に倉田百三の「出家とその弟子・愛と認識との出発」を読んで耽溺し、受験勉強どころではないほど読みふけた。氏の文章に励起されてこれ以上書き進めるのは脱線々々止まります。冒頭の題名の文章は氏の著書を検索すれば出て読めますので、敢えて紹介するのを止めます。ただ、石舞台古墳を見てこんな巨石を運ばせた蘇我馬子という人は日本人ではなかったのではないかという思いが消せなかった。蘇我入鹿の首塚を見て当時の飛鳥が決して和^{やわらぎ}を以って尊しとなす聖徳太子の憲法の心ではなかったとの思いを強くした。

芭蕉の軽み以後 (121)

光成高志

先月に続き宣長の物のあはれ論を宣長自身の言うところを書く。小林秀雄の著書でもカタカナでの原文で書いてあるので、読みやすいように我流で訳して左にしめす。「恋せずば 人の心も なからまし 物のあはれも これよりぞ知る」という俊成の有名な歌につき、或る人が宣長に、この「あはれ」と言うのは如何なる義かと訊ねた。質問者は、語をつづけ、「物のあはれを知るが、即ち人の心のある也、物のあはれを知るが、即ち人の心のなきなれば、人の情のあはれを知るは、只物のあはれを知ると知らぬにてございませうから、このはれは、常にただ、あはれとばかり心得えるばかりにては、詮無くないのでは」と言つた。(これは宣長自身が質問者になつて答えた自作自演の文)宣長曰く、「私は、心には解つたように思いますが、ふと答える言葉がない、やや思い巡らせば、いよいよあはれと云う言葉には、意味深きように思われ、一言二言にて、たやすくむかえらるべくもなければ、重ねて申すべしと答えぬ、さてその人の去つた後にて、よく／＼思い巡らせば、いよくあはれの言は、たやすく思ふべき事にあらず、古い書又は古歌などに使える様をざつと思ひ見るに、大方その義多くして、一かた二かたに使うのみにあらず、さて、かれこれ古き書共を考え

て見て、なお深く調べれば、大方歌道は、あはれの一言より外に、余義なし、神代より今に至り、末世無窮に及ぶまで、詠み出でる所の和歌皆、あはれの一言に帰す、さればこの道の極意を尋ぬるに、又あはれの一言より外なし、伊勢物語源氏物語その外あらゆる物語までも、又その本意をたづねれば、あはれの一言にて、これを蔽うべし、孔子の詩三百一言以蔽之曰思無邪とのたまえるも、今ここに思ひあわすれば、似たる事也」(「安波礼弁あわれのべん」)。この「安波礼弁」は、宝暦八年(宣長29歳)になつた稿本である。小林秀雄の宣長論は延々とつづくのであるが、その講演録からやさしく解釈すると、貫之は物のあはれという言葉は歌人の言葉であつて「舵取り、もののあはれを知らで」と書いたように歌人の特権意識のものであつた。それはけしからん、誰にでもある、使える言葉であると拈げたのが宣長である。宣長は源氏物語を読んで開眼したのである。「すべての人の心というものは、漢文の書物に書いてあるように、一トかたに、つきづりなる物にはあらず、深く思ひしめる事にあたりては、とやかくやと、くだくだしく、めゝしく、みだれあひて、さだまりがたく、さまさまのくまおほかる物なるを、此物語には、さるくだくだしきくまぐままでの、のこるかたなく、いともくはしく、こまかに書あらはしたる

こと、くもりなき鏡にうつして、むかひたらむがごとくにて、大かた人の情ヨロのあるやうを書くさまは、やまと、もろこし、いにしへ、今、ゆくさきも、くらべるべきふみにあらじとぞおぼゆる」。してみると、彼の開眼とは、「源氏」が、人の心を「くもりなき鏡にうつして、むかひたらむ」が如くに見えたという事だった。「おほかた人のまことの情といふ物は、女童めのわらはのごとく、みれんに、おろかなる物也、男らしく、きつとして、かしこきは、実の情にはあらず、それはうはべをつくろひ、かざりたる物也、実の心のそこを、さぐりてみれば、いかほどかしこき人も、みな女童にかはる事なし、それをはちて、つゝむとつゝまぬとのたがひめ計ばかり也（「紫文要領」巻下）。ここにきて私は、我に返り気付いた。式部の物語を少しばかり読んで源氏に敷衍しようと思つても私には無理、思ひ上がりだと。本居宣長のもののあはれ論だつてそう。正直に書いて、おくのほそ道に帰ろう。そもそもそこに出て来る二人の人物の解釈をしようと思つて物のあはれを知った人と決めつけて、恐れもせず小林秀雄の本居宣長を再読して深みに嵌ったのだ。聞いた話であるが、文学部大学院で源氏をテーマに論文を書くとき大体博士に成れるとか、源氏の研究は現代でも課題であつて、おそらく永遠の課題であらうと思う。そういう

う式部の大作を今までああでもないこうでもない注釈書が山ほどあるのだし、それを一寸宣長の源氏論に触れたからと言つて論文が書けるわけではない。まして小林秀雄の宣長論だつて相当難しく思えるのに。我が身を振り返つて忸怩たる思いだと偉そうにここに書いたつて始まらない。只俳人になつて芭蕉の心がちらつと見える瞬間があるのが嬉しくてここまで書いて来ただけです。まだ道半ばなのでこのまま進みます。物のあはれ論は棚上げしていつになるかわかりませんが、保留にしておきます。

俳文広場

① ジョウビタキ附録 この冬初めてジョウビタキの鳴き声を耳にしました。十一月中旬よく晴れた朝の庭、小鳥の気配を感じてあれはもしかしてら・と目をこらす。ツツジの木の間をチョンチョンと懸命に飛び回っている。枝に止まり頭を前傾させ同時に黒いシツポを上下に振りながら鳴いているではないか。独特の高い声でピュルリ・ピュウ・ピュウ・ピュウ・ピツと繰り返し誘うように呼びかけてくる。とても人懐っこい鳥だ。やはりジョウビタキだ。今年もこの庭に来てくれた。鳴き声に合わせてチツチツチツと応えると鳴き返してくる。可愛くて親しみを感じる。しばらくするとどこかへ飛んでゆくが又同じ場所へ戻つて鳴く。お帰り

と応える。何となく寄り添ってくれているようで嬉しくなる。草を引く手も軽くなる。ジョウビタキは越冬をするため、たった一羽でこの辺りを縄張りにして一冬を過ごすようだ。頭のてつぺんはグレー顔は黒胴体は橙色、シッポと羽は黒で羽には白い斑点が左右一ケずつある。橙色と黒のコントラストがとてもきれいで目を引く。今年も会えたとカレンダーに日付を記しておこう。今ジョウビタキが止まっているツツジは四十年も前にこの庭を造る時、池の樹木と共に植えた。大きく育ち庭の中央で毎年ピンク色の花をこんもりと盛大に咲かせ楽しませてくれた。三年前に亡くなった夫も大切に趣味の俳句の中でよく詠んでいたものだ。

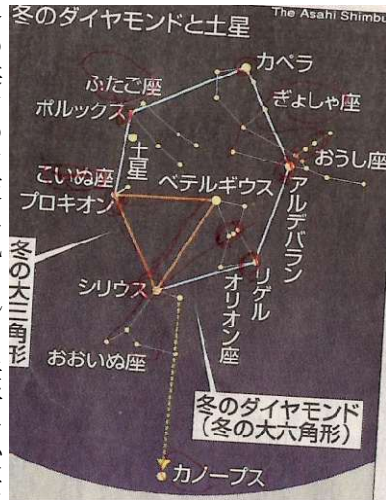
それが今年の猛暑と水不足で二つに分かれていた根株の片側が枯れてしまった。気を付けて水やりしたつもりだが丸い形のまだ艶のある葉が次々と落ちていく。十一月の剪定で庭師さんに半分の本を切ってもらった。施肥消毒剪定落葉掃きとかなり手がかゝる。年を重ねると共に作業の負担を感じるようになってきた。だが、樹木があるかぎり手入れしなければ荒れてしまう。それは見るに忍びない。今まで季節ごとの庭のうつろいを充分に楽しませてもらったからな^あ、小鳥たちのさえざりにしつかり癒されているよね。何よりあの落葉を早く掃き清めて自分の気持ちをすっきりさせ

たいから、“やる元気が出ている”というのが一番の理屈かな。リハビリにもなるかもね。あれこれ思いを巡らせながら草を引く。暖かい小春日の中でこちらの気を引くようにジョウビタキが又ピュルピュウ!と鳴きだした。縮こまった気持ちをほぐしてくれる。暖かくなる四月中頃までは居てくれるだろう。今の自分の出来る範囲で無理しないで庭の事も受け入れなくては・・ほっこりした気分だ。思いを変えてみた。夫の愛したこじんまりと苔むした庭、私にとっても長年手入れしてきた落ち着ける場所である。移りゆく自然現象も又、人の心情もあれこれまとめて”すべてを承ります”と気持ちを新たにしている（^{11.26}廣本幸恵）。

②スコップ鳴らしの媼 忘れ得ぬ人がある。富士川の桜蝦干場で出会った媼のことである。広い河川敷の桜蝦干場に暇そうな媼がぼつんと居た。話しかけてみると「私の仕事は鳥を追いかうことだ」と言つて、すぐに実演してみせてくれた。河口の方から百合鴉の群れがじわじわと筵に近づき出すと、媼はスコップを逆さに持ち鉄の部分に石ころを打ちつけ、カンカンと鳴らす。同時に「ホイホイ」と言いながら駆けていくと、百合鴉はすぐ飛び立っていく。五、六回繰り返ししてくれた。一緒に大笑いした。媼の屈託ない笑顔、あつげらかんとした態度に強い印象を受けた。しかし、私には「山椒大夫」の最後の場面と重なったり、

また、淋しさにまた銅鑼打つや鹿火屋守（原右鼎）に通ずるスコップ鳴らしと思う。再会したいが、まだ果たしていない（H13 光成敏子）。

③ 冬の星



今の寒中の中天に見られる星座に私は毎年のように感動する。右のスカンした図を見て下さい。冬の季語になっているオリオン座は冬のダイヤモンド別名冬の六六角形の中にすっぽり取り込まれています。シリウスとこいぬ座のプロキオン、そしてオリオン座の赤いペテルギウスを結ぶ冬の六六角形もその中に含まれます。図ではふたご座に土星が見えていますが、今はつまり今年の二〇二六年の今は木星が大きく見えています。惑星の名前の通り惑う星ですから年によって

位置が変わります。図は二〇〇五年一月末のものです。私は昔^{平成元年}8.16富士山に登りました。御来光の前に雲海の果てに大きな星が見えてくるが、間を置くと三つの星が垂直にあがってくる。オリオンの三つ星である。オリオンの四角形をみることなく日光の中に消えた。三つ星を大きく見た最初であった。初冬の宵、東の黒き下総台地からあの三つ星が直にせりあがってくるのを見た。地平の拡大現象で中天に上った時より二倍も大きく見えるのだ。オリオンのせりあがるのを見ると冬の到来を思う。オリオンの上る前は御車座の五角形が中天にあり、双子座の長方形が続く。オリオンが高く上ると子犬座、大犬座が見えて来て、所謂冬の三角となる。オリオンを囲む星々の一等星を辿っていくと、オリオンのリゲル、大犬座のシリウス、子犬座のプロキオン、双子座のボルックス、御車座のカペラ、牡牛座のアルデバランであり、これらの星を結んでみると、それぞれ赤星、黄星、青星であり、絢爛たるダイヤモンドのようである。星の密集する昴、釣鐘星が牡牛座に茫と見え、オリオンの涙のような大青雲が見える。この天上風景を眺め、何億光年という宇宙の果てに思いを馳せ、そして物の中の分子原子中性子という小宇宙に思いを詰めていく。その途方もない時空の想像に酔って眠る（1.13 光成高志）。（私が星座に目

覚めたのは小六になった長女が夜空をみてお父さんあれはペテルギウスよ、あれはアルデバランよと言った。私はそういう星の名は知らなかった。驚いてこれはいかんと思ったのが最初。それから五年くらい経って山口誓子の「天狼」に入った。天狼とはシリウスの中国名である。その後誓子に「星恋」という句集がある事を知ってすぐ求め何回も読んだ。今も中央公論社で買える。そのPRに「天文学者・野尻抱影、戦後の俳句界を牽引した俳人・山口誓子。星を愛し、星座の動きに子どものように心躍らせる二人が、天空を眺めながら交わしあった随想と俳句を収める。」とある名著である。私は芭蕉を愛して今も書いているが、芭蕉には星の句はあの荒海や佐渡によこたふ天の川ぐらいしかない。それを補完するのがこの誓子の星恋と思っています。）

お便り広場

光成様いつもありがとうございます。「白金霞」170号18部をお納め致します。本年も大変お世話になりました。ありがとうございます。年末まではもう難しいです。また来年もお手伝いできることがあるとのことありがたく存じます。よいお年をお迎えくださいませ。(122 木戸敦子)。明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。今年は七周目の午年良い年になりますように。白金霞十二月号お送り頂きありがとうございます。年末本棚を整理していて「アビコから九段坂へ」の本を久しぶりに手にしました。懐かしく読んでいます。でもどの経路でこの本棚にあるのか定かではありません。同窓会の時に

頂いたのかなと思いを巡らせています。大変な経験をされましたね。光成さんのお人柄が一杯詰まっっていて温かみがありゆつくり読ませて頂いています。現在お体は大丈夫ですか。今回も自己流の年相応の発想になつてしまいました。でも今の気持ちを表現出来たかなと心の中のシミを吐き出したように書いた後はとてもすっきりします。拙いけれどこのように文字にする機会を頂いてありがたく感謝しております。手・指も少々痛みを感じるようになってきてかし、続けられる限り少しでも書けたらと年を新たにしております。どうぞ本年もよろしくお願い致します。令和八年一月廣本幸恵。(幸恵さんの達筆の手紙読んでキーボードで入力しています。手指には軽く叩いて書けるので楽ですよ。是非ワープロとかパソコン入力を検討下さい。今はやりのスマホも便利です。これからのことを考えるとおすすめします。高志) まだ生きているのもなか／＼大変です。白金霞ますくのご発展、お二万の健康／＼多幸を!! (17 璃子)。昨年も「白金霞」をお送り下さり有難うございました。変わらぬ熱意に励まされます。今年も元気で転ばぬように過しましょう(19 百合子)。正月TV放映のダイヤモンド富士にパワーをもらいました。健康に留意して過ごそうと思っております今年もよろしくお願ひいたします(111 正美)。「白金霞」毎月お送り頂きありがとうございます。ご無沙汰しております。昨年十月下旬から病院通いが続き生活のリズムがくるってしまいましたし

た。しばらく医師の指導に従っていいこうと思います。十二月に琴平に帰省してきました。姉弟三家族が揃い父の一周忌法要を行いました。とても暖かい日和で父と母が見守ってくれているのかなという思いで胸がいっぱいになりました。故郷は気持ち穏やかになりました。以下略（17朋子）。二〇二六年おめでとうございます。今日はもう十二日です。何かぼんやりと正月を過ごしました。気力も行動力も弱くなり静かな正月が良くなりました。雑煮だけは作って食べました。母が作っていたように餅をゆがいて汁をかける私たちが子供の頃から食べていた雑煮です。主人の方は汁の中へ餅を入れての雑煮でしたが、私が作るのは私流です。兄が元気な時は自分で作った糯米で私達はもちろん子孫曾孫まで集まって十二月三十日は一日がかりでベタンベタンと餅つきをしたものです。（以下略）（14幸子）。謹んで新年のご挨拶申し上げます。年賀状をいただき誠に有難うございました。感謝いたします。今年も頑張ります。私は今年で84歳、広大を退職して20年になります。（以下略）（14三浦省五）。

我孫子日記

	12/19	句会
*	12/28	田
*2	1/1	初詣
*3	1/10	駅前クリニック
*4	1/11	あわんとり
*5	1/16	句会・駅前ク

*冬紅葉子らと話して楽しけれ

*2 枯櫓田きらく光る朝かな

*3 沼渡り隣の町へ初詣（みち）

六地藏様にも初参り

初筑波つくば麓の町へ通ひし頃

初景色空より青く沼長く（みち）

初詣人気なき寺猫現るゝ（みち）

元旦や小松菜畑に猫車（みち）

正一位伏見稲荷大明神へ初詣

初鴉人声で鳴く手賀城跡

切干の大笹三つ干されあり

育苗箱に半紙を敷いて初賽銭

*4 寒晴や白きマンション映えてをり

手賀川の白のかたまり瘤白鳥

寒鰯釣りの車連なる用水路

*5 あわんとり中止になつて酒飲むと

鳥総松この強風に傾きたり

編集後記

一月は行く二月は逃げる三月は去るの俗謡があるように、早や一月は行つてしまふ。年末から年の初めの生活が皆季語になつているので、句は沢山出来そうに思うがそうはいきません。気に止めて作句しないと俗事に紛れ消えてしまふ。さて、しかしながら先月から

畏友広谷さんのお蔭で本誌をウェブサイトにあげるこ
とが出来た。創刊時からの俳誌が閲覧できるようにな
った。印刷製本を依頼している木戸敦子さんの真似が
できたということ。手に持って読める冊子はそれなり
に便利だが、昔のものは本箱から取り出さなくてはな
らない。当たり前な事なんだが、それがパソコン前で
は面倒に感じられるほど世の中が変わってしまった。
何事も速く速くなっている。歩いているのが車に乗っ
たり果ては飛行機に乗って移動するみたいに忙しく動
きまわる世である。以前書いたことであるが、一九六
五年に大学を終えてさて就職するかとなった時私は院
生となつて勉強を続けることにした。その年に大学に
電子計算機が入ったので使ってみなさいと言われて、
理学部によく通つて計算してもらつた。上京してから
仕事上計算ばかりしていた思いがあり、電算機アレ
ギーと言われるものはなかった。これが幸か不幸か今
につながっている。電算機は冷蔵庫並みの大きさから
どんどん小さくなり今はパソコンとかスマホと呼ばれ
る手に乗る道具になつて、そこから得られる情報たる
やWorld Wide Webと名付けられているように世界規
模なのです。BSでのワールドニュースでも、世界の
街を歩くでも、恰も自分が歩いているように見せてく
れる。そのせいか西洋に行つて見たいと思わなくなつ

た。以上が本誌をウェブ化したことのコメントです。
次に、本誌の構成の事です。俳句、選句、選評は以前
と同様に三本柱として維持しています。本句会の会員
が自然減少にあること、並びにお便り広場を大事にし
てきたことから、どこかの結社がやっているように、
俳文欄を設けて、俳文も掲載することになりました。従
つて、俳句・選句・選評&俳文の四本柱を本誌の構成
にします。無論お便り広場は生活の季語に通じるので
このまま続けます。今年のはあの東北の大地震から十五
年目になります。本誌も十五年目になります。五年ご
とに記念号を刊行してましたので、今から十五周年
記念号の準備にかかります。連絡の付く方に投稿をお
願ひするつもりです。月々の会報を五年ごとにまとめ
て分冊にして製本しようとも考えています。今年の夏
までには完成させるつもりです。以上で後記にてお伝
えすることは全部書きました。

白金霞一月号（通巻171号）誌代一部千五百円（年会費一万五千元）
郵便振込口座一〇五二〇一四二一三六一名義シロガ ネヨシ令和八
年一月18日発行編集発行人光成高志発行所〒270-1119我孫子市南新木
2-14-17 光成方 投句先…メール又はライン 印刷製本…喜怒哀
楽書房〒950-0801新潟市東区津島屋七二九。表紙の題字は嘉悦羊三
&白金霞&版画賀状&新年の俳句六句&私・みちの初写真&尉鶴&
璃子さんの句集「穴まどひ」よりの選句。